

第29回 ISO/TC35を終わって

財団法人 日本塗料検査協会
技術顧問 吉田 豊彦

第29回のISO/TC35とそのSC、WGの国際会議が2002年4月1日から5日まで東京ビッグサイトで行われた。その概要を記しておこう。

ISO/TC35 のことやTC35 week については本誌の2001年夏号を始めとして度々紹介してきたから、ここでは省略させて頂く。ただ、日本でTC35の国際会議をすることになった経緯について、一寸記しておこう。

1. 国際会議開催までの経緯

日本がISO/TC35のP-メンバーになったのが1987年、その年のブダペストを始めとして2001年のピッツバーグまで13回のTC35 week が行われた。このTC35weekは加盟各国の持ちまわりで開かれている。

13回の内訳は

ハンガリー	1回	ブダペスト(1987)
オランダ	1回	ロッテルダム(1990)
ドイツ	1回	ビュルツブルク(1992)
イギリス	1回	ロンドン(1995)
イタリー	1回	ミラノ(1997)
ノルウェー	1回	オスロ(2000)
アメリカ	3回	サンフランシスコ(1996) オーランド(フロリダ)(1999) ピッツバーグ(2001)
イスラエル	1回	ヘルズリア(1993)
南アフリカ	2回	プレトリア(1991) ケープタウン(1998)
日本	1回	幕張(1994)

むこうの感覚ではヨーロッパで6回、アメリカで3回、その他という感じであろう。日本は1994年に第1回のペイントショーと同時にTC35を開催した。このときの記録は当時の事務局であった日塗工の沼

田氏の編集したものが残っていて、今回の開催準備にも大いに役立った。開催にはやはり相当の経済的、事務的な準備も必要であるが、一面こちらから出席者が出かけに行かなくても、メンバーがわざわざ来てくださるという利点もある。日本は例年数人が出席しているから、その旅費だけ考えても、日本開催は経済的には実はそんなに大きな負担ではないとも言える。

1,2年前のTC35の際に、(じょうだんではあるけれど)、ヨーロッパ、アメリカ、日本で回していったらいいじゃないかという発言もあった位で、前回の幕張からだいぶたったし、ペイントショーの年でもあるということも考慮に入れての「そろそろ日本でやってくださいませか」というお誘いを受けての今回の東京開催になった。1999年のオーランドでの会議のときに、日本は「2002年には東京にインバイトできるでしょう」と発言し、同7月14日の日塗工理事会で承認され、11月11日のTC35国内委員会で正式にホスト国引き受けを決定した。これを受けて組織委員会、実行委員会が組織され、準備が進められた。国際会議の準備から閉会までの、公式な記録は日塗工の豊田部長が作成されるので、オフィシャルかつ詳細なことはそれに譲ることにしたい。

2. 時と所

所は東京ビッグサイト。ここでISO(4月1日～5日)を始めとして、色材協会創立75周年記念国際会議(4月1日～4日)、APIC(Asian Paint Industry Councils Meeting, 4月3日～5日)の各会、そしてペイントショー(4月4日～6日)が締めくくったということになる。

会場はビッグサイトの6階、中央の大会議室は色

材協会にあて、右側の中～小会議室3つを会議に、1室をセクレタリールーム兼コピールームに、その他1室を物置にあてた。パーティは1階のホールで行った。

3. 日 程

ISO関係の日程を記しておく。

4月1日 SC14/WG5, SC9/WG26(予備)
 2日 SC14/WG6 SC9/WG26
 3日 SC14/WG9 SC9/WG16
 SC9/WG23
 SC1 WG1
 代表者会議 ウェルカム・パーティ
 4日 SC14 SC9/WG25
 SC9/WG28
 5日 SC9 TC35

このうち4月1日のWG26(予備)というのは化学発光についてのインフォーマル・ミーティングである。

4. 出席者

TC35としての報告書はまだできていないので、SC9関係だけを記す。SC9及びそのWGの国際委員及び国内委員7名が登録し、国内委員9名がオブザーバーとして参加した。この他にVOC関係など数名が会議に参加している。パーティには経済産業省の稚山室長、宮地技官、TC35国内委員会の縦山委員長、日塗工標準化委員会の大江委員長なども出席された。国際会議期間を通しての日本側出席者総数は30名位であろう。

外国からの出席者は15ヶ国、総数は日本を含めて72名(アメリカ2, イギリス10, ドイツ10, フランス5, オランダ3, スウェーデン2, ノールウエー3, デンマーク1, チェコスロヴァキア1, スイス1, 南アフリカ1, 中国1, 韓国1)となっている。この他にMrs. Bancken, Mrs. Rinvollなど同伴者が数名参加された。

5. 主な議事

- ・数年来進めてきたASTM D-1との協定を更に進める。これはグローバル・スタンダードは1つであるべきだということの現れである。
- ・ISOの全ての文書が電子化される。
- ・TC35関係のISO規格をまとめたHand Bookの新版が出版された。前の版と比較すると次のようにページ数も重さも格段にふえている。

	1994年版	2002年版
分冊数	3	4
総ページ数	1069	3026
総重量	1052g	3124g
収録ISO件数	186	285

重さやページ数もさることながら、TC35の所管のISOの件数が8年間に件数にして99件、1994年に比較すると53%もふえている。この間に廃止になったものもあることを考えると、TC35はかなり活発であると見ることができよう。

- ・以下には各WGでのトピックを挙げてみよう。但し、多少主観的であることをお許し願いたい。

- (1) 塗膜の劣化の評価基準 かねてから日本から提案しているコンピューター・グラフィックスによる図版については、今年度はカット部からのさびの成長の図版を提出し、これも受け入れられた。この問題については日本の提案が非常に歓迎されている。(WG26)
- (2) 塗膜の対屈曲性の試験としてPCMなどに用いられているT-ベント法を提案した。CENの案も出ている。NWIになる見込み(WG23)
- (3) 塗膜の防錆試験でカットするときのカッターの違いによる傷のつきかたについて報告した。NWI提案を作成することになった。(WG25)
- (4) 試験室の温度と湿度 検討を継続する。(注目を継続する必要がある)(SC9)
- (5) 上記の他、WG16(粉体塗料)、WG28(塗液の物理的性質)、でもそれぞれ日本からの発言があった。

6. ウェルカム・パーティ

経済産業省 穂山室長、TC35委員長 Prof. Bancken, 日塗工標準化委員会 大江委員長の挨拶、TC35国内委員会 縦山委員長による乾杯で、和やかな雰囲気が始まった。

歓談の間に、Mr. Rinvollと青木茂委員の声量豊かな独唱を楽しんだ。

このパーティでのフォーカスは、Prof. Banckenが引退されるということであった。日本が初めてP-メンバーとして参加したブダペストでの会議(1987年9月)のとき、既にProf. BanckenはTC35の委員長だったのだから少なくとも15年TC35を指導してきたことになる。TC35のセクレタリーのMs. Stikvoortが心のこもった感謝の辞を述べた。日本びいきであった(と私は思っているのだが) Prof. Banckenへの感謝のささやかな表現として、大江委員長から日本人形を贈った。

このパーティも派手になり過ぎず、ものたりないという程でもなく、ちょうど程よいところで、参加者からは感謝の言葉が沢山寄せられていた。

(なお、私事ですが、私はSC9国内委員会の委員長を今年の6月末で交替することにしましたので、TC35から今までの貢献に対して賞状をいただきました。後任は筒井さんをお願いすることに致します。)

7. 国際会議を終えて

参加された多数の方から感謝の言葉を頂いて今回の国際会議は終わった。ここで特に記しておきたいのは、この会議の準備を一手に引き受けた豊田氏への感謝である。実行委員会の協力もあったとしても、あれだけの準備をし、手配し、動かしてゆくのは並大抵のことではない。さぞお疲れだったろうと推察するのである。豊田さん、どうもありがとうございました。それから実行委員会の皆様、参加して下さった国内委員の方々にもお礼を申し上げます。

ところで、ISOは国際会議で終わったわけではない。この会議の結果を受けて、これからの活動が始まる。今回、東京で開催したことで、初めて国際会議に触れて、今後の対応にいろいろなヒントを得た委員も少なくないであろう。ディベートでものごとが決まる社会の中で、主張と妥協のバランスを保ったISO活動を展開して行かなければならない。十分な根拠に基づいて、日本にとっても、ISOにとってもそれがベストだと誰もが思うような発言をしてゆきたい。そのためには、関係する業界の理解と支援がなくてはならない。これが私の切なる願いである。

